

汲古一心

—講演より— 『書の現代性』(八)

中村素堂

ただ、その中で少し流れを作ってみる。今の仮名を見ると、あれが流れといえるかどうか判らない。流れのように見えるけれども落っこつてきたみたいですね。そしてこしらえた。そこにはしかも滲みと渴筆と、そうじゃなくてわざわざ水を一遍穂にふくませて、それへ墨を付けて、濃淡の綾を出そうという——。つまり絵画的な細工です。絵と同じような技術的細工を施しながら訴えてくる。しかも非常なポリユームの量です。むかし歌を一首書くために二メートル平方もあるような大きなものに平気で据えられる。しかも展覧会に行けば、ああいうものが、いかにも爽やかに短歌のことばの美を訴えてきます。ああいうものを硬質の書というのだと思う。だんだん書が硬質化してくるのは、われわれの生活環境が全部硬質化してきた証拠だと思ふ。履物ひとつでも、われわれは靴などを履いて歩いていっているんです。むかしは武人以外は履かないんですよ、皮などは。殿上などを歩く時は漆塗りのものを履いて歩いていたので、草履とか——。どんな物をとってみても、生活全部が硬質化してしまつた。ドアひとつ閉めてもパチツと音がして閉まる。むかしは音などさせたらいけなかつたのじゃないですか？座つて、襖の手かけでもつて音もなく開ける——。化け物みたいなのがむかしは大変恭々しかつた。足でも正式には上げて歩かないのが原則でしょう。今はそうじゃない。カッカツと歩いてくる。あの姿を見ると、これが硬質の書を書かなければ不思議です。有名な大家でも、古典の書をそのままいくらも違わないで書いている人が沢山いるでしょう？ああいうのを見ていてどうですか？弱いなあと思つて見ているでしょう？すごいなあと思つて見ている人は手習いしている人で、あとはみな弱いなあと思う。やはり墨を豊かにつけてサツと下してくる。それが草書などの線みたいに切れて、さっきの鈴木先生

の話じゃないけれども、呼吸感を持ちながら流れてきて、ちよつと展開を始めるといったら、全く音楽的な魅力をも分に感じるのでしょ？あれは私は、「硬質の書」というのじゃないかと思ふ。書が硬質化してくると、だからひとつの例として、どういふものを誰が書いているのが現代の書でどういふものが何かというより、本来軟質の線で書かれていたものを、もう一度硬質の線に置き替えてみる。硬質の線の量もよい典型というのは、書道では漢字に求めるより仮名です。漢字の中でかなり硬質な流れのあるものをもって仮名の中に応用すれば、それは現代の仮名だと思ふのです。形の上では、同時に書の線でも、今まで西川先生みたいな筆で書かれた篆文など一遍もありません。間違つて釣針になまこがかつたみたいでしょう？あの字は篆文などにひとつもないのですがああいう文字はあつたんです。それをああいう筆で、あんなにまで深い呼吸感、強い呼吸感を与えて、もう一度書き直して硬質に置き替えてみると非常に斬新でしょう。漢字でも何でも、今まであつた造形性を使うのでも、さっきいつた呼吸感の中の、非常に深い呼吸感に応用する。つまり心の呼吸感です。心の呼吸感に応用して大変な迫力を与えてくる。西川先生の線が弱いといわれていても、あれだけの呼吸感をもつて訴えているのですから——。あの方は割合にお弱くて、むかしから何遍も病臥して暮らしていらつしやつても、健康でいるのは、あれだけの呼吸感を持つているからだといつも思ふのです。ああいうふうな硬質のもので訴えてこられると、これは超モダンです。青山先生などは、いちばん篆文を汚らしくしたのはおれだ。と年中いつていらつしやるけれど、そうですね。でも、あのウニみたいな字を書かれると、そこにやはり現代を感じるでしょう？あれは造形の中の硬質化と呼吸感の応用です。(つづく) 《祭墨》昭和五十二年十月

【筆間雑記】中村素堂随筆集(昭和六十三年刊)より転載。



昨夜一聲雁(昭和三十六年)